

2023年9月17日 久宝教会 礼拝メッセージ

「あなたもキリストの一人」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 15章 11-32節

先週の月曜日は9月11日でした。9月11日というと、2001年にアメリカのニューヨークで同時多発テロが起こされた日です。3000人近くの死者が出た悲惨な事件から、もう22年が過ぎました。軍事の研究者たちからは、広島と長崎で核兵器が使用された時から、「今後の戦争からは、勝者も敗者もなくなり、あるのはただの破壊、混沌、無秩序だけだ」と言われていたそうです。全てを破壊し尽くす核兵器の出現によって、これからの戦争は、ゲリラとテロを中心としたものになると予想されていたそうです。しかし、私を含め、多くの人たちにとっては、「テロとの戦い」という言葉を聞いたのは、あの「9.11」からだったのではないかと思います。あれから22年が経ちましたが、世界の各地でテロ、破壊や暴力は止んでいません。ロシアとウクライナの戦争も続けられています。報復が新たな報復を呼ぶ「憎しみの連鎖」は今もなお断ち切られていません。そして、さらに世界全体で格差と貧困がますます拡大して来ているように感じます。そのような時代の中で、今、聖書は私たちに何を伝えて、私たちは聖書から何を聞くことができるのでしょうか。

今日はメッセージのタイトルを、「あなたもキリストの一人」としました。この言葉は、今から43年前の1980年(8月24日)に暗殺されたエルサルバドルのオスカル・ロメロ大司教が、凶弾に倒れるその日の礼拝の前にも、教会にやって来た人たち一人一人に「あなたもキリストの一人」と言って、掛けていた言葉だそうです。当時のエルサルバドルでは内戦が続き、社会全体に不正がはびこり、貧困があふれ、拷問、暗殺などが日常茶飯事だったようです。そのような中、政府もテロと暗殺を認めていることを、彼は批判していたために、礼拝中に狙撃されて殺されてしまいました。混乱と不安の渦巻く中で、それでも必死に生きていた町の人たち一人一人に、「あなたもキリストの一人」「あなたの命も掛け替えのない大切な命」「今も生きておられるキリスト、神様の命は、あなたの中に確かにあります」ということを、彼が命を懸けて伝えていたということを想像すると、胸が詰まる思いがします。

さて、先程お読みしました今回の聖書のお話は、いわゆる「放蕩息子のたとえ」として有名なお話でした。以前の新共同訳聖書には「放蕩息子のたとえ」という小見出しが付けられていましたが、新しい聖書協会共同訳では「いなくなった息子のたとえ」と小見出しが変更されています。いずれにせよ、二人の息子のうち、弟の方が相続した財産を無駄遣いをして身を持ち崩し、路頭に迷った挙句、食べるにも困った所で我に返り、一度は捨てたはずの故郷の父のもとに帰った所、謝罪の言葉を述べる前から、一方的に父親から抱きしめられ、赦され、歓迎されたという美しいお話です。父親のもとからいなくなり、放蕩の限りを尽くす息子とは、神様のもとを離れてしまった私たち人間のことであり、まだ遠く離れていたにもかかわらず、自ら走りよって来てくれ、そんな駄目息子をも歓迎してくれる慈悲深い父親とは、神様のことだと理解されることが多かったのではないかと思います。

しかし、このお話はそのような読み方をするだけで、本当によいのでしょうか。「身を持ち崩す」程の「放蕩の限りを尽くせる」程の、とまではいなくても、多少なりとも無駄遣い出来る人であれば、自身をこの弟に重ねて読むことが出来るかもしれません。しかし、その一方で、初めからその日その日の食事にも事欠くような人たちにとっては、このお話は全く共感出来ないものになってしまうのではないかと思います。そして今から 2000 年前に、実際に歴史の中を歩まれたイエス様が、このたとえ話を語られた人たち、つまり当時のガリラヤ地方に住んでいた人たちは、圧倒的に後者、すなわち日々の暮らしにさえ事欠くような、貧しくされた状態でした。

そもそも、このたとえ話には不自然な点がたくさんあります。このお話の中で「父親」とされている「ある人」は、多くの土地、家畜、しもべ達を所有している富豪、大土地所有者、権力者です。その財産は当然息子たちに相続されることになっていますが、当時のユダヤ律法では亡くなる前から受け継ぐはずの遺産の生前贈与を求めることは、それら財産の所有者である「父親の死を待ち望んでいる」とことと理解され、認められていませんでした。ですから、本来であれば、弟が「お父さん、私に財産の分け前をください」と言った時点で、「何をふざけたことを言っているんだ」と父親自身が明確に拒否したり、また兄や母親が、弟をたしなめたりするの

が通常でしたが、ここではそのようなことは全く現れてきません。また仮に先祖伝来の土地を相続することができたとしても、その土地を売ってお金にすることも律法では禁じられていました。

何はともあれ、故郷の父の家を飛び出した後、下の息子は相続した財産を使い果たして、食べる物にも困り果ててしまいました。そして彼は「ある裕福な人のところへ身を寄せ」とありますが、その人は彼を喜んで助けるどころか、彼に豚の世話をさせました。ユダヤ人にとって豚は「汚れた動物」と見なされ、嫌われていたから、要するに「面倒な奴だ。わざと嫌な仕事を与えることで、さっさとどこかへやってしまおう」と考えられたのでしょう。ところが、驚いたことに彼はその豚飼いの仕事を受け入れました。それこそ「背に腹は代えられぬ」程に困窮していたのでしょう。そのようにして、彼は困り果てた挙句に、飛び出して来た父の家に戻ることを決心します。

しかし、一度飛び出して来た故郷に戻ることは、そう簡単なことではありません。「家を捨てた」ということは、「ムラという地域共同体を捨てた」ということでもありますから、仮に帰郷したとしても、家族だけではなく地域の人々からも拒絶されることも十分に予想されました。それでも、彼には他の選択肢はありませんでした。そして、不安でいっぱいの状態で、故郷への帰路に着いた彼を、父親は予想外の待遇で、歓び迎え、盛大な祝宴をすぐに行いました。「肥えた子牛を屠った」というのは、単に家族でお祝いしたということではなく、地域の人々を招待して、息子が生きて帰って来たことをお披露目して、ムラの一員として再び認めて欲しいとお願いしたためだと理解することができます。

その一方で、事の次第を知らされていない兄の方は畑から戻って、祝宴の音楽や踊りの音を聞いて怒り出します。本来であれば、長男は父親に次ぐ立場ですから、一家の<sup>あるじ</sup>主として、宴会に来てくださった地域の方々をホストとしてお迎えして、接待すべき存在です。にもかかわらず、その兄には弟の帰還は知らされず、祝宴でも役割を与えられず、大勢のお客さんたちを前にしながら、父親と兄とは仲違いして、口論しています。とんだ恥さらしの状態です。さらにまた、両者の仲裁役としての妻、母親の姿はどこにもありません。それらのこともまた、このお話の不自

然さを表していると考えられます。

いずれにせよ、この不自然な家族関係、崩壊した家族のお話をイエス様の口から聞いた人々は、何を思ったでしょうか。心の広い寛大な父親の姿に、慈悲深い神様の姿を重ねて思い浮かべたでしょうか。それとも弟を甘やかし、えこひいきし、兄を説得できない情けない父親の姿を見たでしょうか。それとも、自分たちの生活実態から、一見かけ離れているように思えるこのお話を聞きながら、実は自分たちの周りでも、地域関係も家族関係も同じように壊れているじゃないか、ということに気付かされていったでしょうか。

私たちは、聖書を読む時、どこから読んでいるでしょうか。聖書は、誰と一緒に読むか、どこに立って読むかによって、そこから示されることが大きく異なる書物です。私たちがこの「いなくなった息子のたとえ」の話を読む時、そこから示されることは、他でもない私たち自身が、時にはこのお話に出て来る弟、「いなくなった息子」であり、また時にはその弟のことを赦すことができない兄であり、さらには父親としてちっとも適切にふるまえない不甲斐ない父親でもあるのだ、ということなのではないかと思います。完璧な人、完璧な家族はいません。誰しものが、どこかしらに欠けている部分、足りない部分、弱さも持っています。そして今の時代は、ますます地域も家庭も壊れている部分がどんどん広がっており、命が大切にされにくくなっているのではないかと感じています。

けれども同時に、それでも全ての人には神様につながった存在として、全ての人が「キリストの一部」「キリストの一人」として、今日も生かされているのだと思います。明日9月18日は「敬老の日」です。今日まで掛け替えのない命を連綿とつないで来てくださった数えきれない先人たちのおかげで、今があります。そのことを覚えながら、今週も出会わせて頂く一人一人に対して「あなたもキリストの一人」「掛け替えのない大切な命」と、声をかけることの出来る、そんな一週間を過ごせればと願っています。